



82
まいん

しさがしましやたく

四阪島社宅



2階建頂上アパート群(昭和44年建設)

職員用は部屋がいくつもあある一戸建や二戸建てでしたが、従業員用は共同トイレ、共同風呂、一家に二間程度の狭い平地に石垣を組んだ長屋形式のいわゆるハーモニカ社宅でした。

島の人々のくらしは、島の人が皆家族のようで、家にはカギをかけることもほとんど無く、何かあれば近所の人たちと助け合えるとても温かく、安心した暮らしでした。



島の子供たち
昭和33年撮影
別子銅山記念館所蔵

その後、社宅の取り壊しが行われましたが、現在でも一部の社宅・社宅団地のコンクリートの建物が新居浜側からも見ることができます。

しかし、島の人たちのつながりは強く、四阪工場勤務経験者のOB会である『一島一家の会』が結成され、現在も毎年4月には、四阪島で総会が開かれ、桜を見ながら親睦が深められています。

しさがしましやたく 四阪島社宅

ほとんどは、明治時代に建設されました。

社宅は、美ノ端、美ノ浦、日暮、西日暮、頂上、巽浦、糯ヶ岡、吉備峠、吉備浦、東巽、明見谷、北浦という地区があり、総戸数968戸でした。

社宅は格付けがされていて、職員用、準職員用、従業員用と分けられていました。



社宅団地
(昭和41年建設)

四阪島の人口は、製錬開始直後の明治38年1月には900世帯あり、3,549人でした。大正末期には人口のピークを迎え、5,500人を突破しました。

大正10年(1921)、四阪島製錬所大改革により、3,000人台まで激減しますが、それ以降約40年程は大きな変化はありませんでした。

しかし、新しい製錬所(現:東予製錬所)が新居浜側に建設され、昭和46年(1971)に操業を始め、その後、昭和51年12月に四阪島製錬所の60年余りに及ぶ製錬の火は消え、昭和52年5月からは新居浜からの通勤体制となり、島の住民は病院の勤務者などのごく限られた人のみでした。

そして、昭和63年6月島住民完全撤退となり、四阪島に住民は居なくなりました。



島の家族 昭和33年撮影
別子銅山記念館所蔵



一つの島 一つの家族
瀬戸内に輝く一島一家物語